

## 平成27年度 第1回 大口町子ども・子育て会議 議事概要

日時：平成28年2月18日（木）13：00～15：00

場所：大口町健康文化センター 1階 多目的室

### 1. あいさつ

#### <会長>

○昨年度、大口町の子ども・子育て支援事業計画の策定にあたりご協力いただいたお礼

○昨年度あった文部科学省の家庭教育推進のための調査によると、理由がないのにイライラする子どもの率が、小学生 25.4%、中学生 34.5%、高校生 43%となっている。原因を探る中、小学校5、6年生の5,000事例を対象に見てみると、イライラする子のうち 46.5%が午前0時以降に寝ており、遅寝との関係があるのではという検証結果が出ている。

○小1プロブレムについて、日本体育大学の研究チームが小学校1年生を対象に調査した結果、大脳前頭葉の5つの型のうち、「そわそわ型」が増えている。これは、幼稚な脳で集中することが苦手でじっとしていられないタイプである。1969年の調査の約1割から2008年には6、7割に増えており、この「そわそわ型」の増加が学級崩壊の背景にあるのではとされている。

○子どもたちの自己をコントロールする力が減っているのは、社会全体の遅寝や、外遊びの減が原因ではないかとされている。外遊びによる身体能力、知性、ルールを理解する力、協調性、社会性を育てる場が減っている。大事な子どもたちを健やかに育てるために、どのような見守りが必要か、計画をさらに充実したものにできるように話し合いたい。

#### <健康福祉部長>

○昨年度策定した子ども・子育て支援事業計画の進捗状況の報告にあたり、更に充実したものになるよう、委員の皆様の立場からご意見をいただきたい。

○大口町の出生率の推移は、平成20年から右肩下がりできており、平成25年に199人まで落ち込んだが、平成26年には、241人まで戻っている。合計特殊出生率は、国1.38、県1.51に比べ、大口町は1.72であり、尾張北部圏域でも一番高くなっている。また、65歳以上の高齢化率については、近隣市町に比べ低く、そのうちの介護認定率も県内で一番低い方である。これらのことから、若干、他市町より少子高齢化に備える準備期間があると考えるが、子育て支援計画の中の少子化対策も含めどのような子育て支援ができるか、限られた時間の中、本日もみなさんの忌憚のないご意見をいただきたい。

### 2. 委員会メンバーの自己紹介

### 3. 議題

- (1) 大口町子ども・子育て支援事業計画の進捗状況について

事務局より「大口町子ども・子育て会議設置条例」及び資料No.1「大口町子ども・子育て支援事業計画の進捗状況について」を説明

<会長>

- ただ今の事務局の説明に対して、ご意見、ご質問をいただきたい。
- 特にないようなので、承認してもよいか。
- 異議なしとのことなので、承認とする。

(2) リーディング事業の進捗状況について

事務局より「大口町子ども・子育て会議設置条例」及び資料No.2「リーディング事業の進捗状況について」を説明

<会長>

- リーディング事業ごとに検討をする。

①子育て支援の中核拠点づくりと子育ての居場所ネットワーク事業

～地域ぐるみの子育て支援の面的な展開作戦～

<会長>

- 委員の中で、説明に対して担当としての立場からの補足等はないか。
- 補足がないようなので、意見をいただきたい。

<委員>

- 新しい子育て支援室の検討に、子育て団体として加わらせていただき、木育カフェなどでは、母親たちの期待度が膨らんでいることを感じる。来年度に向けていいものにしていきたいので、皆さんの意見をお聞きしたい。

<事務局>

- 木育カフェについて説明。正式な会議ではなく、数人のグループごとに子育て支援室について、人、物、事をテーマにどんなものにしたいかを話し合った。地域の5～60代の人、父母の会など、みんなで積み木作りをしながら話し合い、5回開催した。岐阜県立森林アカデミーの先生の助言をいただきながら、地域でこの支援室を盛り上げ、子どもを真ん中にした街づくりをしたいという思いで開催した。

<会長>

- 中核拠点としての支援室を平成29年度から立ち上げるとのことだが、今後どのくらいの回数で協議されるのか。

<事務局>

- 平成27年の夏ごろから子育て支援に関わる保育士、児童センター職員と事業の洗い出しを各分野で行い、今までに3回くらい検討会議をもった。子育て団体から建設的な意見をいただき、出された提案書の検討をする。また、今後の青写真、方向性の検討を進める。生れてから18歳くらいまで継ぎ目のない繋がりをもつことを考えると、保健師にも声かけをして、回数としては不明だが、平成28年度9月を目途に案を組み立てていきたい。

<会長>

○どんな支援室を作ってほしいか、意見はないか。

<委員>

○一番は行きやすいかどうかが大事だと思う。行っていいのか、どんなところかわからないと、利用できない。

<会長>

○どんなところか、利用しやすいのか、広報などで詳しい内容の周知をしっかりとしてほしい。

<委員>

○グレーなところ、弱いところがある子どもに対して、他の子とトラブルにならないように発達状況に合わせて何か教えてもらえるところがあるといい。

<会長>

○一人一人の成長に応じたケアをしてもらえるところだとよい。継続しての関わり、指導が一本化しているとよい。

<委員>

○今とは違うタイプの子育て支援の教室があればよい。子ども同士のトラブルなど、問題が起きる前に指導できればいいと思う。

<委員>

○児童センターで入園前の団体生活を学べる場があったこと、ママ友ができたことが子どもにとっても、親にとってもありがたい。小学校への入学については不安があるが、センターで放課後を過ごせると本人も慣れたところで心強いし、親としても安心できる。

<会長>

○保育園、児童センター、保健師という横の繋がりもさらに充実してほしい。

<事務局>

○委員の意見を土台にして、今後もさらに信頼関係を職員一同築いていきたい。

○新制度になり、放課後児童クラブの利用者が増えているが、ニーズ量を超えた確保量となっている。

## ②子育ての孤立化防止支援事業

～子育ての孤立化ゼロ作戦～

<会長>

○関係する委員さんからご意見はないか。

<委員>

○赤ちゃん訪問はほぼ 100%だが、このところ来てほしくないという母親がいたので、保健師に繋いだケースがあった。理由は不明だが、地域の民生・児童委員として見守るようにしている。この訪問事業に対して、民生・児童委員の方からは特に問題等は聞いていない。

<委員>

○健康生きがい課としては、町から委嘱した助産師が訪問をしており、問題があると判断した家庭については、保健師が個別で訪問し、相談にのっている。第2子、第3子の場合、訪問をいいと言われる家庭もある。

<会長>

○相談した内容については、保育園等に入所する際に情報は繋げているか。

<委員>

○福祉こども課に伝達している。

<事務局>

○個別のケースに応じて、保育園、福祉こども課の全体で対応し、更に保健師の協力を得る場合もある。

<健康福祉部長>

○この事業を始めた当初から、訪問を拒否されるケースも想定しており、訪問の同意を得られなくても、地域には民生委員・児童委員がいますよ、困った時は声をかけてくださいねと言う事だけでも周知できればいいと考えている。

○初め拒否されても、4か月児健診で実際に顔合わせをすると、同意をもらえるケースもある。

<会長>

○町全体で家庭をケアする動きができています。

○妊娠期から思春期までの間の問題を親だけが悩むのではなく、一人一人に対しての子どもカルテ、子育てカルテのようなものを作り、町でデータを一元化できないか。支援センターの機能に繋げて考えられないか、検討してほしい。

③子どもの発達・成長に応じた継ぎ目のない支援事業

～子どものライフステージ・ギャップゼロ作戦～

<会長>

○課題、状況についての説明をしてほしい。

<事務局>

○小学校区ごとの連携会議出席者について

西小学校…幼稚園・保育園・児童センター・小学校・中学校・保健師

北小学校…幼稚園・保育園・小学校

南小学校…幼稚園・小学校、保育園・小学校

学校区で取り組み方、回数も違うが、今後はどの小学校区も中学校まで繋げていきたい。

<委員>

○西小学校区の連携会議に出席すると、その子が小、中学校になってどうなっていくかが分かるが、中学校の卒業時までケースとして上がる子は、幼保時の環境や教育を引きずっていくと感じる。

○おとなしい子、話していなかった子が中学校になって登校拒否になるなど、情報を伝

えていくことの大切さを感じる。

<会長>

○西小学校区での取組みが充実しているという声があるが、縦の連携についてどのように考えるか。

<委員>

○西小学校区でこの取組みが始まったのは、危機感があり学校として必要に迫られたためである。当時問題がある児童が多く、専門の医師に相談して始まった。それが、今も効果的に働いている。

○他の学校での、幼稚園、保育園、小学校の連携については、必要な会議であり、十分機能していると思うが、そこに中学校が入ることが必要かどうかは別の問題で、学校、地域としての必要性など精査する必要があると思う。

○小学校と中学校は児童を送りだすので、今後も密に情報連携は取っていく必要がある。

<会長>

○子ども一人一人の育ちを町全体で、輪切りではなく一貫した見守りをするということはどう思うか。

<委員>

○本町の小学校3校、中学校1校は、他市町より連携が取れていると思う。幼稚園、保育園、小学校についても非常によく連携が取れていると思う。情報を中学校まで上げることについては、北小学校区、南小学校区で必要かどうか、子どものために必要かどうか、検討していく必要があると思う。

○小1プロブレム、中1ギャップは、本町にないとは言えない。低いがないわけではない。いかに家庭、学校、地域が子どもの背中を押してやれるか。相談する相手が少ない、小さなコミュニティの中にいる子どもを見守っていくシステムを大変ではあるが、継続できるものをみんなで作りあげることが必要と思う。

<委員>

○保育園では、毎日送迎時に保護者に直接話ができるので、通学班登校や学校生活など連携会議で得た情報を保護者に伝えて、少しでも不安の解消になればと思う。

<会長>

○会議で子どもの名前が出ることは、レッテルを貼るわけではなく、その子の支援に繋げるためであり、共通認識を深めるためのものである。

#### ④幼児期の保育や児童の放課後対策の充実

～あんしん保育拡大作戦～

<会長>

○ご意見をいただきたい。

<委員>

○4月1日から小学生は児童クラブに行くことができる。

○幼稚園は、卒園式後に子どもの面倒を見ることができない保護者がいて、預ける場がなく困っている状況がある。

○近年の虐待をみると、乳幼児期の親の愛情の希薄さがあるように感じる。親を巻き込んだ預かり、親子で接する機会をつくるなど、支援の在り方も見直す必要を感じる。

<委員>

○親子の育ちを見守ることが大切である。その育ちを支えるためのものとして、町として子育てカルテを検討してほしい。母子手帳発行時からの子どもの育ち、親の育ちを見ていくものがあると、それが継ぎ目のない支援のベースになると信じる。

<会長>

○子どもを預けるところがない期間をどうするかも課題のひとつだろう。

○親としての自信をどうつけていくか、町として子育ての楽しみ、喜びを感じられるような取組みも課題のひとつではないか。

○妊娠から思春期まで見守っていくためのものを検討してほしい。

<会長>

○全体についてどう思われるか。

<委員>

○今日の話がいろいろ実現できるといい。

○団体の立ち上げからやっていることは、基本的には親が子どもをつくるということ。子どもが親になって子どもを育てる、教育は学校の先生がやるということを常に思う。

<会長>

○時間の都合もあり、本日の話し合いはここで終了とするが、よろしいか。

○今年度の話し合いが次の年度の子育て会議として機能するように宿題をもらったんだという思いでいる。

#### 4. その他

<事務局>

○委員の任期は2年間で、今年度で終了となる。当職以外の方には、引き続きまた委員としてお願いしたいので、年度が替わったところで依頼をする。